書き抜き読書ノート 2175	2016 年 7 月 30 日

中島信吾著「沢村貞子 波瀾の生涯」岩波書店 1997 年 1 月 28 日刊を読む

夫を語る―コマーシャルはだめ―

１．大橋恭彦さんは、無菌動物のように潔癖な人間でした。

２．たとえば、どんなことがあっても、コマーシャルに出てはいけない、というのだそうです。

３．テレビ全盛時代となり、ネコもシャクシもコマーシャル。売れていることは、すなわちコマーシャルにどれぐらい出ているか、という物差しさえある時代。コマーシャルに出なくなったということは、忘れられたということ、それぐらいにコマーシャルはタレントのバロメーターになってしまっています。

４．それでも、大橋さんは出てはいけないと言いつづけました。

５．「あの人のいうことのほうが、なるほどと思うんのよね。大橋がいうには、コマーシャルに出ると、たくさんお金をくれるから、うまくやらなくちゃだめだ。したがって、ああなるほどと思うものをやらなきゃだめだ。それがうまくいくと、あれは、期間だけの約束で何回というのはないんだから、何回でも出す。あんたは、脇役でさんざんちょいちょい、出過ぎるほど出ている。そこへまたコマーシャルで出たら、飽きられちゃう。だから、仕事も少なくなっちゃうし、第一自分が恥ずかしくなるだろう。僕だって恥ずかしい。だからだめだっていうのね」

６．「ほかの人は、みなさんやってらっしゃるから、それについては、とやかくは言わないんだけどね、ほかの人に悪いから。それだから言わないけど、私はコマーシャルをしないということだけで通してきているの。花森さんにそう言ったら、そこが気に入ったというのね」

７．花森さんの生存中『暮しの手帖』もついにコマーシャルと無縁で通しました。

８．それゆえに信頼されたのです。

＜コメント＞

女優 沢村貞子さんが自らの生涯を語る中で、夫である大橋恭彦さんのことばの重さを知ることのできるエピソード「コマーシャルはダメ」。この考えは「暮しの手帖」も同じであり、現在にも受け継がれている。一本筋の通った生き方だと高く評価したい。

― 2016 年 7 月 30 日（土） 林 明夫記―